

学級通信にみる保護者への「お願い」

—小学校学級通信の分析を通して—

“Requests” for parents in Classroom Newsletters:
Analysis of Classroom Newsletters in Elementary School

山口 真美

Manami YAMAGUCHI

(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

本稿の目的は、小学校学級通信の分析を通して、日常生活において教師が保護者に何を伝え、求めているのかを明らかにすることである。ある小学校において1年間に発行された学級通信約280号分を分析した結果、学級通信は保護者に子どもの学校生活の様子を伝える一方で、様々な要望を伝える機能を持っていることが明らかになった。

キーワード：学級通信, 計量テキスト分析, 小学校, 「お願い」

[Abstract]

The aim of this paper is to clarify what teachers tell and ask of parents in daily life by analyzing classroom newsletters. I analyzed a total of about 280 issues of classroom newsletters published between April 2018 and March 2019 in an elementary school. In conclusion, it was discovered that classroom newsletters have the function to convey various requests while they inform parents of the school life of their children.

keywords: classroom newsletters, quantitative text analysis, elementary school, "requests"

1. 問題の所在と先行研究

学校と家庭をつなぐツールのひとつである「学級通信」は、日本全国の学校に普及している実践である。『現代教育学事典』（青木ほか1988, p.75）によれば、「学年通信・学級通信」は、「学年や学級ごとに、学校・教師の教育活動、子どもの状況、その他家庭への連絡事項などを記載した子どもや家庭への通信のこと」と説明されている。学級通信は戦前の生活綴方教育の影響を受けて始まった教育実践であり（荻間澤2002）、昭和30年前後にはその原型が見られるという（明石

1986)。近年でも、学級通信を発行しているという教員（小・中学校）は8割弱に上り、発行したほうがよいと考えている教員は9割を超えている（理想教育財団2018, p.17）。

学級通信の発行は必須ではないため、教職課程や初任者研修で学ぶ機会が必ずしも設けられているわけではない。義務でもなく負担も小さくない学級通信を作成する大きな理由としては、生徒指導や学級経営への効果がある。たとえば、社会経済的に厳しい校区の学校に勤務するある教師は「表面に表れた問題に対する直接的な学級指導・生徒指導が『特効薬』であるなら、学級通信での学級指導は、表面的には問題のない時にも、常に用意された『常備薬』と言える」（西田1994, p.332）と述べている。

しかし、学級通信の実践的蓄積に比して研究は少なく、中でも実際の紙面で何がどう書かれていて、保護者に対して何を伝えているのかというメッセージ自体の検討はなおざりにされてきた。優れた教育実践家の通信紹介や通信作成の手続き的知識をまとめた教師向け書籍が多数出版されている一方で、研究上では学級経営に主眼を置いた数点の教育実践論文のほかには、一部（大日方2008）を除いて学級通信への着目が薄い。他方、義務教育段階以上に保護者との連携の必要性が想定される幼稚園や保育所に目を移すと、お便りのメッセージを対象とし、紙面の構成要素や記載内容、文章表現等に着目した分析がなされた研究の蓄積（田中・三宅2001、箕輪ほか2018）があることから、これらを参考にした研究発展が義務教育段階においても望まれよう。

以上を踏まえ、本稿では学校と家庭の連携を支える学級通信を分析することによって、保護者に対して何が伝えられているのかを明らかにすることを目的とし、その結果から学級通信の機能を考察する。なお、本稿では、教師が学級通信をどのような思いで作成し、伝えようとしているのかという意図ではなく、保護者に届く実際の紙面の「言葉」として何が書かれ、伝えられているかという事実の分析を主題とする。分析から導かれる結果は、小規模1校・単年度の資料から分析であるため、試論的なものに留まる。とはいえ、学校で広く行われ、実践的蓄積のある学級通信に着目し、そこでの「言葉のあり方を包括的に、多面的に、細やかに追いかけてやうとするこの営みは質問紙調査によって代替されるものではないし、インタビュー調査や参与観察などもまた異なった独自の意義」（牧野2019, p.79）を持つ。

2. 研究方法

本稿では実際に児童生徒・家庭に配布された学級通信・学年通信の分析を行う⁽¹⁾。分析に用いる資料は、関西圏の公立スギオ小学校（仮名。以下、スギオ小）において2018年度に発行された1～6年生の学級通信および学年通信である。筆者は、2016年度後半からスギオ小で学習ボランティアとして参与観察を行い、教師らとラポールを形成して、資料の提供を受けた⁽²⁾。スギオ小は、各学年1～2学級、児童数約250名の小規模校である。なお、中学校や高等学校段階においても学

級通信の実践は存在するが、小学校でより広く行われている実践であり、さらに読み手として保護者が期待できるという点から小学校段階を取り上げることとした⁽³⁾。

スギオ小全体における学級通信への取り組みの姿勢を担任教師らに尋ねたところ、その発行は強制されていないという⁽⁴⁾。そのため、単学級の学年は、学年通信と学級通信の両方を発行している場合もあれば学年通信だけの場合もある。複数学級ある学年の学年通信は、担任教師らの分担や交替制で作成されている。また、発行に際しては、管理職による文章表現面のチェックがあり、子どもや保護者が不快に感じる表現や不適切な表現がある場合については変更を指示しているという。しかし全体としては、学級通信は自発的な取り組みとされており、教師らの伝えたいことがある程度自由に紙面に表れていると考えることができる。

次に、分析にあたっては、KH Coder を使用する。KH Coder は計量テキスト分析のためのフリーソフトであり、計量テキスト分析では質的方法（内容分析）と量的方法（テキストマイニング）の要素を往還して知見の算出を目指す（樋口 2014）。計量テキスト分析の利点は「データ探索」と「信頼性の向上」にあるという。本稿で計量テキスト分析を採用する理由は、学級（学年）通信という媒体に何が書かれているかを全体的に把握しつつ、その情報を用いて記事や語の内容について検討するという目的に適していると考えたからである。

スギオ小において学級通信および学年通信は、基本的に B4 版 1 枚もしくは 2 枚（裏表で 1 枚）で作成されているが、号によっては B5 版の場合もある。また、1 学級につき、多いところで 50 通程度が発行されていた。本稿で分析と対象としたのは、1～6 年生の学級通信と学年通信の全 279 号である。記事数については、基本的には紙面の割り当てに沿ってカウントした⁽⁵⁾。内訳は、1 年生 61 号（200 記事、以下同）、2 年生 50（179）、3 年生 55（211）、4 年生 22（91）、5 年生 62（161）、6 年生 29（98）である（複数学級を含む）。また、通信の中の文には、保護者と子ども向けのものが混在しているが、紙面上のメッセージはすべて保護者の目に入るという点から、本稿では誰向けの文であるかの区別は設けずに分析を進める。

分析の下準備として、収集した資料 1 枚ずつを、記事ごとにテキストデータ化した。その際、発行者（教師）が書いた部分のみを対象とした。つまり、写真、子どもの感想や作文、保護者からのメッセージ等は除外した。また、「今月（来月）の予定」として箇条書きで掲載される日付・曜日については、出現頻度が高くなってしまい分析に影響を及ぼすことから削除した。さらに、児童の名前については、分析に影響しないように処理した。こうして作成したデータベースは、延べ語数 95,873 語、異なり語数（語の種類）4,859 語であり、うち分析対象となった自立語はそれぞれ 37,417 語、4,163 語であった。

3. 結果

3.1. 頻出語から見える多量の「お願い」

まず、通信の中に頻出する語を確認する。頻出語として抽出された上位の単語は次のようになった（カッコ内は出現回数。下記の単語で全体の15%をカバーしている）。

お願い（423）、子ども（396）、思う（299）、学習（293）、頑張る（282）、時間（275）、持つ（255）、学期（250）、予定（221）、たくさん（208）、ありがとう（188）、自分（178）、運動会（172）、授業（164）、練習（149）、人（148）、学校（143）、給食（143）、国語（142）、生活（138）、先生（138）、家庭（136）、下校（134）、書く（134）、保護者（130）、見る（130）、算数（126）、夏休み（124）、教室（124）

これを見ると、1番目の「お願い」と2番目の「子ども」は400回近く登場しており、3位以下と比べて圧倒的に多いことが確認できる。保護者相手の文書に「子ども」が頻出するのは言わずもがなであるが、「お願い」は注目に値する。教師が「お願い」をする相手として児童は考えづらいので、ここから通信で保護者に対して多くの要望が伝えられていることが読み取れる。また、名詞は学校の予定に関わるものが多く、動詞では「思う」「頑張る」「持つ」「書く」という語が散見される。原文を確認したところ、「思う」は教師の推察、「頑張る」は子どもたちの努力への評価、「持つ」は「持ってくる」の形で家から物を学校に運ぶ行為、「書く」は「作文を書きました」という報告、あるいは「名前を書いてください」という要望と共に用いられることが多い。

3.2. 保護者に「お願い」する内容

前項では、「お願い」の語が頻出することが判明したが、実際のところ、どのような「お願い」が述べられているのだろうか。保護者への要望が述べられる際には、「～していただくよう、お願いします」や「～してください」という表記になることが想定される。たとえば、田中・三宅（2001）では、学級通信（園だより）において事務的な内容が多くを占めており、さらに文末が「～下さい」や「～お願いします」、「～しよう」で終わる要請・要求的なセンテンスが多いと指摘されている。そこで、保護者に向けたメッセージに付随すると考えられる「ください」⁽⁶⁾と「お願い」の語を合計して、すべての文に占める割合を算出したところ、15.5%となった。

次に、要望の中身について見ていく。具体的にお願いする内容は、要望を表す単語の前（左側）に出てくることを踏まえ、検索した⁽⁷⁾。その結果出現した「要望」と関わりの深い語を回数とともに以下に示す（カッコ内は出現回数。下記の16語で全体の約6割を占める）。

持つ (145), お知らせ (54), 協力 (46), 準備 (33), 用意 (28), 書く (21), 確認 (20), 見る (20), 来る (17), 応援 (14), 思う (14), 入れる (14), 聞く (13), 点検 (11), 連絡 (11), お話 (10)

目を引くのは、3桁に上る「持つ」の出現回数の多さである。出現数100回を超えた「持つ」について、元の文に戻って確認すると、「持たせてください」あるいは「持ってきてください」という形で、家庭にあるモノ（学校で配って家庭で保管していたモノを含む）を学校に移動させるという要望が最も多いことが分かる。たとえば、「生活科の学習で“あさがお”を育てます。ペットボトルにキャップをつけたじょうろを使って水やりをしますので、5/11(金)までに500mlの空きペットボトルを持たせてください。(中略) おうちにたくさんあれば、いくつか持ってきていただけると助かります。ふたはいりません」(1年B組5月2日)といった調子である。モノの内容を検索したところ、「タオル」が最も多く、次いで「お茶」「水筒」、あるいは「(筆者注：音読や水泳の)カード」「ノート」「お金」「コンパス」「ビニール袋」など多岐にわたっていた。また、「持つ」のほかには、「お知らせ」「連絡」といった教師への伝達をお願いする内容、「書く」「見る」「来る」など具体的な指示、「協力」「用意」「準備」という全体的なお願いなどが含まれている。

3.3. 記事内容の分析

最後に、通信に含まれる記事全体がどのような種類に分かれるのかを把握していく。ここでは、クラスター分析(Jaccard距離, Ward法)を行い、記事を分類した。この分析では、似通った語を含む文書のグループには、どのようなものがあるのかを探索できる。集計単位は、記事ごととし、同一記事内で出現する語の組み合わせを、出現パターンが似ているものと見なされるようにした。その結果、7つのクラスターに分類され、それぞれの特徴語が示された(図表1)。なお、クラスター数については、クラスター結合水準の値の変化や特徴語の係数等を総合して設定している。

特徴語を参考にすると、それぞれのクラスターは、次のような文脈のもとにあると考察することができる。すなわち、クラスター1：学習予定、クラスター2：行事の予定、クラスター3：お知らせとお願い、クラスター4：保護者への思い、クラスター5：自主学習紹介、クラスター6：運動会、クラスター7：日常生活の様子、である。

家庭との連携という側面から注目すべきは、クラスター3(お知らせとお願い)とクラスター4(保護者への思い)である。クラスター3と4においては、全体の頻出語だった「お願い」が登場している。クラスター3では、「暑くなってきました。汗拭きタオルや水筒の飲み物を毎日持たせてください。よろしくお願いします」(1年A組6月28日)や「(筆者注：冬の体育時の服装のままりについて)体調等で配慮が必要な場合は連絡帳でお知らせください」(3年B組12月3日)などから、お願いとお知らせの内容が主であると考えられる。またクラスター4では、たとえば「行事を通して、子どもたちは立派に成長することができました。これも保護者の皆様のご協力のおかげです。

クラスター1(87)		クラスター2(96)		クラスター3(148)		クラスター4(180)	
国語	0.6750	土曜チャレンジ	0.4646	お知らせ	0.4824	お願い	0.3390
算数	0.6083	始業式	0.4495	持つ	0.4413	保護者	0.3303
理科	0.5446	予定	0.4332	お願い	0.3394	思う	0.3263
音楽	0.4914	下校	0.3876	(金)	0.2795	皆様	0.3191
社会	0.4778	地区児童会	0.3469	使う	0.2062	協力	0.3091
体育	0.4643	行事	0.3134	(火)	0.2012	子ども	0.3085
図工	0.4359	開始	0.3010	場合	0.1975	家庭	0.2117
学習	0.3122	水曜教室	0.2784	体操	0.1963	学期	0.2105
リコーダー	0.3118	集団	0.2330	タオル	0.1899	ありがとう	0.1952
歌	0.3093	委員	0.2328	用意	0.1871	時間	0.1942
クラスター5(28)		クラスター6(56)		クラスター7(308)		分類不可(37)	
紹介	0.3692	頑張る	0.2057	たくさん	0.2678		
自主	0.2553	運動会	0.1515	自分	0.2458		
ノート	0.2333	練習	0.1439	頑張る	0.1971		()内は記事数
少し	0.1447	応援	0.1279	子ども	0.1789		数字はJaccard係数
ローマ字	0.1290	延期	0.1014	楽しい	0.1778		
自己	0.1143	ダンス	0.0952	思う	0.1686		■は仮名
作文	0.0727	競技	0.0952	ありがとう	0.1662		
漢字	0.0658	週間	0.0897	人	0.1630		
上達	0.0625	賞	0.0862	先生	0.1574		
手紙	0.0588	ピカピカ	0.0847	学習	0.1561		

図表 1. 記事のクラスター分析

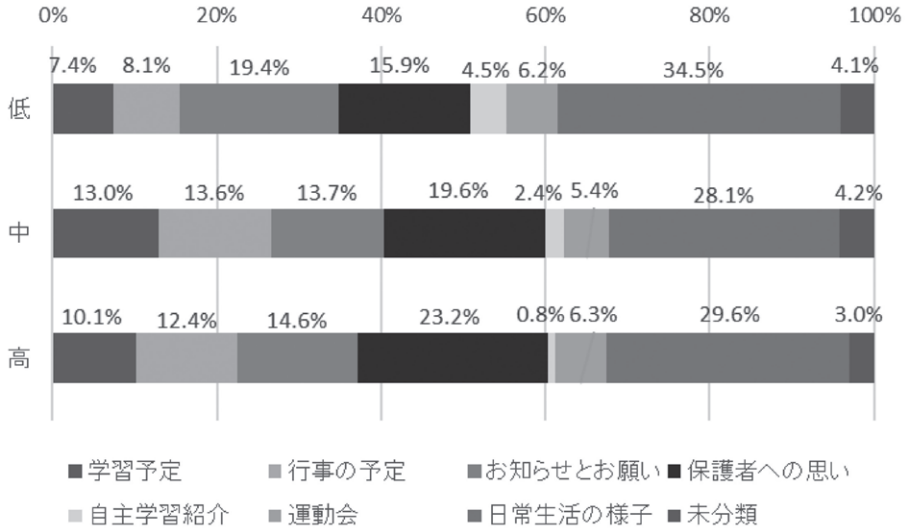
本当に「ありがとうございました」(2年学年通信12月21日)のように、「保護者」という単語が「ありがとう」や「協力」と同じ文脈で使われていることが示されており、「お願い」するばかりではなくそれに対する感謝も「保護者の皆様」と呼びかけつつ通信中で述べられていることが分かる。

そのほかのクラスターについても簡単に確認する。クラスター1では教科名が大勢を占め、通信にその月の学習予定が定期的に掲載されていることが伺われる。それに対してクラスター2では、行事に関する予定が含まれている。クラスター5は分類されている数は少ないが、特徴語から自主学習として調べてきたことや取り組んだことの紹介がなされているグループだと思われる。クラスター6は運動会関連の話題である。全国的に見ても、小学校で「運動会(体育祭)を年に1回以上」行う学校は98.4%もあるとされ(ベネッセ教育総合研究所2010)、主要な行事の一つであり、スギオ小の学級通信でも多く取り上げられていることが伺える。

最後のクラスター7は雑多なものが含まれており、日常生活の様子が描かれていることが推察される。学級通信(クラスだより)には、行事前だけに回収されない日々の教育の場面が掲載されている(柴崎・会森2016)ことを示していると言えるだろう。このクラスターに関連して、計量的に扱えない子どもたちの活動の写真や、教師の言葉でないためデータベースから除外した子どもたちの作文や行事の感想文、自習ノートが、実際の学級通信にはほとんど毎号と言ってよいほど多く掲載されていることも付言しておきたい。

また、これらのクラスターが各学年でどの割合で現れるかを示したのが、次の図表2である。どの学年段階でも「日常生活の様子」クラスターが多く約3割を占め、次いで「保護者への思い」ク

学級通信にみる保護者への「お願い」



図表 2. 学年段階別 記事の種別の割合

ラスターや「お知らせとお願い」クラスターが15～20%前後である。ただし、「日常生活の様子」は低学年で最も多い（34.5%に対して28.1%と29.6%）のに対して、「保護者への思い」は増加している（15.9%→19.6%→23.2%）。「お知らせとお願い」は低学年で6ポイントほど大きいですが、どの学年でも10%台である。低学年では初めての学校生活の様子を細やかに保護者に伝えることが通信の大きな役割となっている一方で、高学年では学校教育活動に対する保護者への感謝等を改めて伝えるという役割を担っている様子を伺うことができる。

4. 考察と今後の展望

学級通信は保護者に言葉で何を伝えているのかという本稿のリサーチクエスションに対する答えは、端的にいえば多量の「お願い」である（3節1項）。そして、その「お願い」の内実について、要望される内容という質的側面から検討したところ、「持つ」という動詞との関連が強いことが示された（3節2項）。ここで考えてみたいのが、学校に持ってきてほしいとお願いされるモノについてである。今回のデータからは、それほど特殊なモノの用意が家庭に要望されているわけではないように思われる。しかし、学校側からしてみれば「ちょっとしたもの」の用意が難しい家庭もある。柏木（2020, p.144）は「あってはならない差異を前提に、誰もが利用できるモノと文化を提供する学校としての仕組み」が「子どもの貧困」に立ち向かうために有効だと述べている。学級通信で伝えられる「お願い」が叶うとは限らない。持ってくるようお願いされたモノが用意できない場合に、その家庭の子が学校でどのような処遇をされているか等の学校現場の状況について検討し

ていくことは、連携の実質的な在り方を考える上で重要である。

では、学級通信は「お願い」一辺倒なのかというと、決してそうではない。紙面の記事内容を分析したところ、複数に類別されていた。そのなかでは、「お願い」とともに保護者に対する感謝が述べられていたり、日常の様子が多く伝えられていたりする傾向が読み取れた(3節3項)。つまり、ここまでを総合すると、学級通信で子どもたちの日々の学校生活の様子を伝え、あるいは保護者への感謝を述べると共に、多量の「お願い」が保護者に日々届けられ、特にモノを持って来させるという役割を期待していると言える。

子どもの学校での様子を知りたいという保護者の高いニーズ(ベネッセ教育総合研究所2018)に、学校側は学級通信だけではなくホームページやメールマガジン等、様々なメディアを通じて応えようとしている。特に新型コロナウイルス感染症流行後は、保護者が来校して子どもの様子を知る授業参観等の機会も制限されているため、そのニーズは増大していることが予想される。本稿で明らかになったのは、直接見ることができない我が子の学校生活の様子を「知りたい」という保護者の要望に対して応答しつつ、同時に多量の「お願い」を発し続ける学級通信の姿である。そして、「お願い」一辺倒ではなく学級運営や日々の教育実践への協力に対する感謝を伝える場ともなっている通信は、連携という名のもとに学校の「支援者／学習者」(Vincent2000)の位置に置かれがちであるにも関わらず国際的に見て学校教育に対して協力的だと言われる日本の保護者の姿勢(恒吉2008)の醸成に寄与してきたのではないだろうか。これに関連して、吉川(2004, p.107)は、学級通信は「連絡など単なる情報の伝達の道具ではなく、ズレをはらみながらも結びつきあうダイナミズム、つまり、関係づくりにその本質がある」と述べる。今なお保護者からの高い期待が寄せられる学級通信⁽⁸⁾について、本稿での知見を標としつつ、言葉に込められた教師(発信側)の意図と保護者(受信側)の解釈やそのズレ、あるいは相互作用について検討することが次なる課題である。

注

- (1) 学級通信と学年通信は厳密に言えば異なる性質を持つと考えられるが、保護者に対して学校の日常の様相が届けられている点では相違なく、事典等でも同一項目とされていること、事例校の単学級で片方のみを発行している学年があったことから、通信の分析の端緒を開くという点も踏まえて本稿ではまとめて扱うこととした。
- (2) 学級通信の取り扱いに関しては、学校が特定されないこと、学年・組と担任教師の情報が結びつけられないことを条件に、学校長から資料収集の許可を得た。また、各学級担任に研究の主旨を説明し、同意を得られた9学級から資料の提供を受けた。
- (3) 管理職へのアンケートで、81～100%の割合で学級通信を発行している学校が、小学校では71%に対し、中学校では45%であった(理想教育財団2018, p.46)。また、保護者へのアンケートで学級通信を必ず読むという回答は、小学校で81%であるのに対し、中学校では56%であった(同, p.68)。
- (4) ただし、1年生の初期は(ひらがなを習っておらず)自力で連絡帳を書けないため、学級通信に1週間の時間割や授業の使用物を含み、必ず発行されるという。

(5) 記事のカウントに関して、下の例で示すと記事数は4である。



(6) なお、「ください」についてはデータ中に多く存在するが、頻出語等では補助動詞（たとえば「くださる」）を扱わないのが通例のため、本稿の初めの部分では登場していない。

(7) KH Coder の操作としては、サ変名詞と動詞のみに限り、その語の前後出現数を最大値の5に設定して集計した。数値の算出方法は、KWIC コンコーダンスで、抽出語「お願い」の検索結果+「ください」（補助動詞、強制抽出指定）の検索結果-「お願い&ください」の検索結果。

(8) 「学級通信が必要」と答えた保護者は86%、小学校では90%に上る（理想教育財団2018, p.70）。

参考文献

明石要一, 1986, 「学級通信の分析」『現代教育科学』354号, pp.140-147.

青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・斎藤浩志・鈴木秀一・山住正己編著, 1988, 『現代教育学事典』労働旬報社。

ベネッセ教育総合研究所, 2010, 「第5回学習指導基本調査（小学校・中学校版）」。
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3243> (2023年1月17日確認)。

ベネッセ教育総合研究所, 2018, 「『学校教育に対する保護者の意識調査2018』ダイジェスト」,
https://berd.benesse.jp/up_images/research/Hogosya_2018_web_all.pdf (2023年1月17日確認)。

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。

荻間澤真人, 2002, 「学級通信記事における教師メッセージの研究」『教育メディア研究』Vol.3, No.2, pp.43-52.

柏木智子, 2020, 『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり』明石書店。

牧野智和, 2019, 「『言葉』を分析することの意義とその留意点」『日本労働研究雑誌』2019年4月号 (No.705), pp.75-80.

箕輪潤子・秋田喜代美・中坪史典・砂上史子・高木恭子・辻谷真知子, 2018, 「幼稚園はお便りを通して何をどのように保護者に伝えているのか」『武蔵野教育学論集』(5), pp.201-217.

西田芳正, 1994, 「生徒指導のエスノグラフィー」『社会問題研究』43(2), pp.323-352.

大日方真史, 2008, 「教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築」『教育学研究』75(4), pp.27-38.

理想教育財団, 2018, 『学校における各種通信の実態と教育効果に関する調査研究 最終報告書』理想教育財団。

柴崎正行・会森恵美, 2016, 「保育所における保護者支援についての検討」『大妻女子大学家政系研究紀要』52, pp.157-162.

田中亨胤・三宅茂夫, 2001, 「園だよりにみられる教育メッセージ分析」『学校教育学研究』第13巻, pp.99-107.

恒吉僚子, 2008, 『子どもたちの三つの「危機」』勁草書房。

Vincent, C., 2000, *INCLUDING PARENTS?*, Open University Press.

吉川成司, 2004, 「コミュニティ・ネットワークとしての学級通信」『創価大学教育学部論集』第55号, pp.99-110.